

〔平成 24 年度 博士学位論文要旨〕

中国雲南省^ワ佤族の神樹崇拝に関する比較文化学的研究

言語教育研究科 比較文明文化専攻 博士課程（後期） 李 静

内容の要旨

本論文は、中国雲南省佤族の神樹崇拝に関する比較文化学的研究である。論文の構成は以下のとおりである。

- 第 1 章 中国西南地域の少数民族の自然崇拝（雲南省を中心に）
- 第 2 章 「木鼓祭」から見る佤族の神樹崇拝と女性原理
- 第 3 章 「村の心柱立て」行事における佤族文化の女性性
- 第 4 章 日本の神樹崇拝における女性原理
- 第 5 章 結論

本研究は雲南省の少数民族の「自然信仰」を中心とする自然観と日本文化における自然観とを比較し、その相違と共通性が、如何なるものかを考察するものである。少数民族の自然信仰に関しては、まず彼らの生活と深く関わる森（聖林と神樹）と水を取り上げ、多くの事例を通して日本のそれらと比較した。その上で、少数民族と日本の伝統文化を貫く中核的要素は「いのちの繋がり」などであることを明らかにする。両者の文化の特徴の一つである山と森の文化の検証は、今日の環境問題の解決に重要な意味を持ち、その成果を生かすならば地球文明に多大の貢献ができることを示す。また、両者の持つ共通的文化要素が女性原理の生命観である点を主張する。女性原理の生命観は「共生」という概念に不可欠な生命観であり、生命の本質を解明するための道である。女性原理は自然と人間の関係や、自然界の共通性と多様性を提示し、我々に「共生」という生命観を与えている。

本論文は、考察対象の雲南省少数民族に関する先行研究、事例集、各種調査報告、古代文献などを広範囲に収集し、それらを分析し、考察を行ったものである。また、筆者は、上記の文献資料を使った考察に加え、2006年～2009年の間、中国国内の佤族・ハニ族・タイ族の居住地域に入り、現地調査を実施した。特に調査対象のひとつである佤族の村で「木鼓祭」と「村の心柱立て」という二つの重要な宗教行事を観察し、これに関して村人に聞き取り調査を行った。

本論文は以上のような観点からの考察を基に4章から成っている。第1章ではまず、雲南省を中心に中国西南地域の少数民族における神樹崇拜と水信仰に関する数多くの事例を挙げて、生命の源が水にあり、生命の樹の源も水にあることを論じる。これらの例の考察を通して、少数民族の信仰が多神教的であって、そこには様々なものを受け入れる柔軟性があることを論じた。更に、この柔軟性を持つ精神は、「生命の循環」という思想に基づいており、その象徴が神樹信仰と水信仰であり、これは森と水が秘めた大いなる生命の循環を尊重する思想であるという結論を示した。すなわち、少数民族の文化的構成要素には「生命の循環」という思想がその背景にあり、更に女性原理というものがその根底を形成している。

第2章では、2006年に雲南省西盟県で現地調査をした木鼓祭を取り上げ、木鼓信仰の本質が女性崇拜であることを論じた。木鼓祭では、男性が、バチで神樹から作られた木鼓を叩くことにより、男女交合の姿を模擬する。この行事は新しい生命の誕生と万物の生長を、神霊に祈願する宗教儀礼である。更に、穀霊スーオーブ（女神）の生命力を喚起するためにかつて行われていた首狩り習俗と比較・考察することで、この儀礼は再生・豊穡を祈願する祭祀であることを論証することができた。

第3章では、2009年に滄源県翁丁村で行われた「心柱立て」行事を取り上げた。「木鼓祭」の祭祀対象が女神・穀霊であるのに対して、心柱行事においては祀られる神様は祖先の神霊（祖霊神）及び村全体の守護神としての神格を備えるものであると考えられる。更に、祀られている村全体の守護神は男性と女性の特徴を兼備している。また、上座部仏教が供犠の変化及び祝詞の内容などの祭祀習慣に大きな影響を与えている点を論じ、これらの村々で見られる一見男性優位の社会習俗は、上座部仏教及び儒教などの後世の影響であり、基本は女性上位の社会であると論じた。また、諏訪大社の「御柱」と佤族の「村の心柱」という2つの柱立て行事を比較し、両行事における祭神の共通点や立てられた柱の本数、供犠の

変化について考察した。両行事の比較を通して、それらの共通点を探ることができた。つまり、両行事の淵源には樹木崇拝、また山の神信仰、ひいては強盛な生命力への希求ともいえるべき精神文化があると言える。

第4章では、日本文化の自然観、自然信仰の考察を行った。また日本の柱崇拝と神樹崇拝の関連性についても論証した。柱の祭祀行事の原初の形に遡れば、それは神樹であり、強盛な生命力への希求から生み出されたものであることが明らかである。従って、雲南の少数民族と日本人には通底するものがあり、2つの民族がその伝統を持ち続けてきたことを示した。また、第4章では本研究のテーマである神樹崇拝と水信仰に関して、女性原理に基づく循環・「いのち」の重視という信仰文化との関連を探り比較・検討した。これらの比較・検討を通して、神樹崇拝と水信仰の持つ自然観に通底するものとして、「再生と循環」を求める点や、強い女性性を有する点、すべての「いのち」を大切にし、「いのち」に対して謙虚の情を持つという共通点を示した。

このように、本論文では少数民族の自然崇拝の中核にある「いのち」の文化について言及はしたが、これは、更に深く考察を加えなければならない問題である。従って、今後の課題として、この「いのち」の文化に視点を据えて、共生が求められている時代の人間のあり方をより深く考察したいと考えている。また、「いのち」の文化がいかに関一神教の文化圏に発信されていくべきかについては、21世紀の文明構築にどのような役割を果たすことができるのかという点を軸に考察していきたい。今後の研究においては、グローバリゼーションという流れのなかで、国家という枠組みを超えて、少数民族の伝統文化を再評価していきたいと考えている。

